

玉露叢

八

集

御家

和書門類	三三三〇號	函架冊	二〇冊
------	-------	-----	-----

內閣文庫	和書類	三三三〇號	二〇冊	函架
------	-----	-------	-----	----



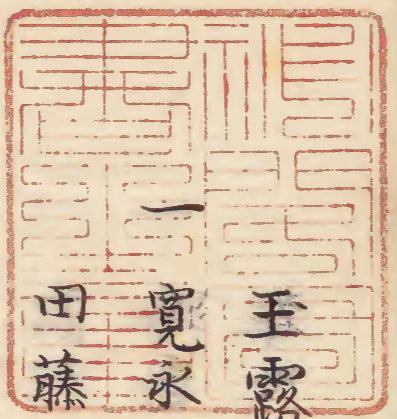
內閣文庫	番號	和 35130
	冊數	20(8)
	函號	150 83

第三

共二十



附 36



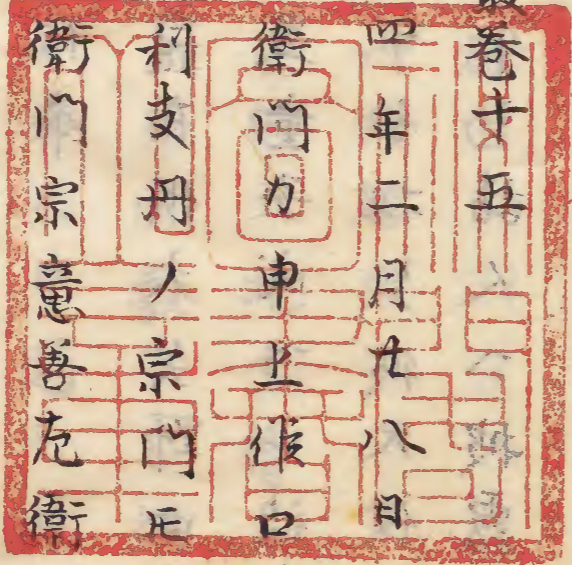
玉露叢書十五

寬永十四年二月九日

田藤右衛門力申上作口

今度吉利支丹ノ宗門正

門源左衛門宗意善左衛門



江津ニ於テ生捕八山

上ノ覺書

一揆ノ根元ハ本ニ右來

門十卜廿六ヶ年以前ヨ

天草ノ内粟嶋卜申所ニ山居住罷在候力去年

六月中旬ノ比右五人ノ者申認メ之ク抑天草ノ

内高江卜申処ニ罷在ル婆天連共是修行者ヲ云廿六ヶ

年以前ニ公儀ヨリ異朝へ御追放ノ刻右ノ伴天

連氏一卷ノ秘書ヲ記シ殘置儀其内ニ曰當年ヨ

り二十六年目ニ當テ童子一人爰ニ来ルヘシ是
吾等カ宗門ノ善知識ト知ルヘシ此人学スノ諸
宗ノ奥儀ト極メ天ニ記シテ顯シ本ニ一ニテウ
ヲ十ラセ野山ニ白旗ヲ立テ東西ニ雲ノ燒ル夏
必有ヘシ然共吾刀一宗ノ在処ハ聊燒間敷ヨシ
大書置作事

一 天草ニ罷在假大矢野四郎時貞ト云者右ノ昼物
ニノ也置童子成ヘシ被書引合セ考ヘ見ルニ毛
頭連ト十ニ扱ハ彼天使ニ疑テトテ彼五人ノ
者比貴ト云諸人ヘ披露申サセ假夏時貞此時行

年十六歳也

一 貴利至丹峰起致スヘキ時節ハ丑ノ六月十五日
成ヘシ其時天地ニ響クホトノ不思儀アルヘシ
坊々驚キ申間敷ヨシ彼五輩常々申聞假夏
一 右五人ノ者比申通を月ト目トハ連ヒ假ハ比丑
ハ十月五日ノ夜陰ニ卒ニ毀理至炭比蜂起仕リ
在方所々山々谷々ハ引籠リ罷在假依テ頭分ノ
者共會合セシ人相談申テ云ク急キ人數ヲ催シ
嶋原天草其外処々ノ御代官并ニ他宗ノ面々也
家波門等ニ至テ我宗門一味同心十キ奴原比

ヲ逐一ニ切殺セト下知スルヨリ早クメタクト
討殺シ何モツ下リク世ツ処ハ引籠申候夏

一右之様子氏ヲ高嶺ノ城主松倉長門守勝家ノ留
主居ノ者聞付テ人數百余人ニ武具ヲ持セ大江
村ト云処ハ押寄セ邪宗ノ奴原氏四十余人討捕
人數ヲ城ヘ引トラントセシ処ニ吉理志丹ノ殘
黨跡ヲ慕ヒ嶋原ノ城下ニテ飛來テ互ニ火花
ヲ散シテ戦ヒシ内ニ邪宗氏城門ヲ打破リ既ニ
乱入ントセシカニ城兵盡ク爰ヲセニト稠ニリ
防キ申候ニ付徒黨共叶ヌメ引取サマニ城下町

屋其外神社佛閣在々所々殘ラヌ放火セシメ
ノレクカ在処ヘ引籠申候夏

一彼殘黨等亦寄相議メ云ク天草ノ四郎時貞ヲ大
將ニ取立申スヘキ旨評議相極メ則四郎方ヘ使
者ヲ以テ申テ云何モ此二三ヶ年以前ニ宗門ヲ
コヒ口ヒ申セシ夏後悔テ存シ候間今度改
テ元ニ飯シ御自分ヲ大將軍ト仰キ申度存シ何
ニ連狀連判ヲ以テ此ノ如クニ御座候御同心ニ
於テハ御返簡ヲ相待ノ由委細ニ申シ達シ候夏
一四郎時貞カ返答ニ云使第口上ノ趣委細兼知也

一人倭然共此事一宗ノ人々一揆蜂起ニ付若輩
短智ノ我等ヲ大將ニ致サレ度ノ旨身ニ取り生
前ノ面目此時ニ倭併各存知ヨツテノ処ヲ辞退
ニ及ハシテ何トヤラシ隔意カクシク倭ノ間
足下ノ不簡ニ任スヘク倭尤倭ハ一味ノ惣人
数中有増シ書立相越サレヘキノ旨返答有リケ
レハ何モ喜悅ノ眉ヲヒラキケルト云云扱時眞
ハ大失野宮津ト云処ニ人々數七百ホト相カク
テヒ世間ノ様子ヲ見合ヒ申ス内ニ嶋原ノ者は
悉ク馳加リ倭ハ一程十リ五千奈ノ大將ト成ヌ

- 一 籠城キ相議ヌ五月十日ヨリ在ル処ヲ人米
- 一 穀尼亦有次第取運セ也其上江ノ津ニアヒ長門
- 一 守重次ノ藏米ヲ五千石余棄取申候ヌ
- 一 四郎時負義ハ十一月四日ニ彼古城へ取籠リ申
- 一 倭惣人數ハ男女共計四旦五日兩日ノ間ニ籠城
- 一 之ヲ城普請ハ五日六日此兩日ニスキト成就シ
- 一 ケレハ小屋氏ハ七日八日ニ悉ク仕廻候テ旗ヲ
- 一 揚ケ申候事
- 一 九月ニ天草ヨリ男女共二千七百余人船ニテ
- 一 着岸申候將亦大江ノ濱ニアヒ処ノ舟氏共残ラ

一 不歩コハハ候テ城ノ塙ノ困ニ任リ候三木不夕
 一 テノ早舟ヲ一艘計リ残置申候
 一 右籠城ノ男女都テ三万七千余是尸ルヲ其村キ
 一 リニ方々ハ午配リ申候
 一 城中ニ放テ頭分ノ者ノ覺
 一 勝佐村月峠村三會村此三ヶ村ハ大將分ハ即左
 一 衛門次右衛門仁兵衛宗右衛門久藏六左衛門以
 一 上六人
 一 有馬村本津村串山村此三ヶ村ニテハ治右衛門
 一 吉藏太兵衛長久太右衛門久右衛門以上六人

一 深江村小濱村有江村此三ヶ村ニテ作十郎久兵
 一 衛甚右衛門休意清七郎藤七郎藤四郎以上六人
 一 上津往村安德村牛之村此三ヶ村ニテハ久兵衛
 一 大藏市兵衛覺以五郎左衛門七右衛門以上六人
 一 大夫野村江ノ津村ニテハ七右衛門甚右衛門次
 一 郎兵衛玄察浪人甚吉甚右衛門以上六人
 一 右者世人ハ其村々ノ庄屋五人組等也
 一 軍奉行之面々

戸塚仲兵衛 是ハ以前大野修理大夫
治房カ家来ナリ
 松嶋羊之丞 是ハ松倉長門守勝家
陪臣ノヨリニナリ

醫師休意有江村ノ者
相沢玄察浪人十リ

以上

- 一 十二月廿日ノ城攻ノ時松平右衛門佐光之請
取番ニ居ラレ候ニ付委細ノ義ハ不存候翌年ノ
正月朔日ノ城攻ノ時ハ極月晦日ハ晚ニ其旨有
増知申候ニ付城中ニテ死傷ノ人数僅三十七
一人御座候也
- 一 二月廿一日ノ夜討ノ時ハ寄年大江口ヲ以テ
申候惣人数十リ

- 一 卒四百人者
- 一 六百尺者
- 一 右之陣之花飛彈守忠茂ト松倉長門守勝家人
數五千八人者仕寄也出丸ヨリ千是ハ鍋嶋信濃
守勝茂仕寄ノ人数十リ
- 一 其河城中ハ半員四百三十人也此内六十人城
中ノ引取申候事
- 一 右衛門儀ハ箭矢頭レ候テ搦テレ松山九ノ罷有
候事
- 一 城中ノ鉄炮ノ數以上五百三十挺也玉藥公正月

一 末ヨリキレ申候ニ付テ申ス候然尺女嗜置候
ヲ廿七日ニ申セ申候

一 城内ノ兵糧ハ二月十日比日ヨリキレ申ニ付テ籠
兵及難義ノハ尺女ハ野モアル由ノ事

一 右衛門佐義ハ四郎乃家老ニテ内外ノ義能ク存
シ候夏

一 籠城ノ浪人皆四十人十人右ノ内年来四十計ノ
男成程軍人ト云々云々ノ強弱ヲ知リ諸夏軍

一 軍術切者ニテ候此浪人何方ヨリ參候テ籠城仕
候ヤ云々其在処誰モ存ス候夏

一 或時四郎時貞本丸ニ於テ固碁ヲ候テ居候

錫嶋信濃守勝茂ノ望據ヨリ石火失テ申カケ

ルカ左ノ祝ヲ切テ其玉ニテ四郎刀側ニ罷在

候男女六七人ヲ殺サレ申候依テ城中ノ男女内

々何様四郎ニハ名譽ノ義アルヘキト思ヒ未頼

母ニクセシカ尺只今ノ風情ハ四郎サヘアル如

クナレハ未々ノ義思ヤラレテ各力ヲトシケル

トナレ彼井樓ヨリ申カケ申ス石火失ニテ午貞

死人數コレアリ城兵尺十三人仕候

一 彼右衛門佐存候ハ四郎下石ノ仕合故籠城ノ面

クイサニ申サス候折節有馬左衛門佐直純ヨリ
矢文ニテ仰セ聞ラレ候ハ汝事譜代ノ者ナレハ
直純ニ對シ疎略アルヘキトハ思スナリ何ソキ
夕テヲ以テ忠義ヲ盡シ候ヘカニ左モアラハ其
儀ヲ高聞ニ達シ其方事一簾御取立遊ハサレ候
ヤウニ此左衛門佐カ身躰ニカ入テモ言上ニ及
ヘシト度々仰セ聞ラレ候付右衛門佐此ニ於
テ思フヤウハ頃目ノ様体ヲ考見ルニ四郎カ武
運モ漸ク頌又然ラハ生ノ知謀今義十ルヘシト
ニ夫仕右衛門佐支配ノ勢七百余輩是アル内五

百人程ニ右ノ事ヲ申談シケレハ何モ寂ト一味
申候故扱ハト思直純ヘ矢文介ケルヤウハ控者
請取り口分三ノ九ニテ候間廿一日ニ彼口ヨリ
御ヨセナサレ候ハ早速城内ヘ引入火ノ午ヲ
アケサセメメト城ヲ象トラセ申スヘク候扱
其第四郎ヘ控者介サメヲ申スヘキハ寄手ノ猛
勢城内ヘ乱入セシメ火ヲ放テ候間此止ハ防
キ方便ナシ早々城中ヲ退玉ヒテ濱ノ午ヘ御廻
リ小艇ニ召レテ何国ヘモ落行玉ヒテ時節ヲ御
待然ルヘシト夕ハカリ申ヘシ其時濱ノ午ヘ御

人数ヲ出サレ時負ヲ御生捕候ヤウニ忠義仕ヘ
シト書認テ二月十八日ニ左衛門佐陣中ニ矢文
射ケル処ニ見付王ハス廿一日ノ午筈相違シテ
ケリ亦右衛門佐不審思ヒケル処ニ左衛門佐陣中
ヨリ亦廿一日ノ晚景ニ矢文ヲ射ラレテ云返札
ノ趣速ク見付テ今日ノ首尾ヲ違ヘ返々モ口惜
キ次第ニ去十カヲ重テ日限ヲ相定メラレ申越
ルヘシ御相違ルルニシキ由仰セ入レラル其矢
文ヲハ城内ノ者見付直々ニ四郎ニ披露シケレ
バ扱ハ右衛門佐カ心替リシツル下テ則搦メ松

山下出シ置右衛門佐カ妻子夫ハ廿七日殊形ノ
内ニテ切捨ニケリ右衛門佐ヲ搦メ置候松山ニ
小笠原右近太夫人數乱入り彼ヲ見付既ニ切ニ
下ス時左衛門佐ヨリ王ハ此矢文ヲ披見ニ入ケ
レハ助命有テ今度ノ生捕メ人数ニ成スル莫

一 右有馬公二月廿八日ニ落城也

一 城兵以上八千百九人

一 嶋原ニ籠城ノ邪宗合テ二万七千百四人也

一 寄手ノ半負死又ノ覺

一 半負 千六百五十八人

一 討死

二百十三人

右細川越中守忠利ノ家来

一 千員

三百四十五人

一 討死

二百十三人

右松平右衛門佐忠ノ家来

一 千員

三百十五人

一 討死

二十五人

右黒田甲斐守長重ノ家来

一 千員

百五十六人

一 討死

十六人

一 千員 右黒田東市正高政ノ家来 十三人

一 千員 右平兵衛重盛 六百八十三人

一 討死

百六人

一 千員 右錫嶋信濃守勝茂ノ家来

一 千員 右藤原新守 百八十五人

一 討死

七十八人

一 千員 右有馬玄蕃頭豊氏ノ家来

一 千員 右藤原重盛 三百七十九人

一 討死

百二十七人

一 千員 右立花毛弾守忠茂ノ家来

一 年負 立 守 家 九 十 七 人
 一 討 死 二 十 七 人
 一 年 右 松 倉 長 門 守 勝 家 家 來 十 九 人
 一 年 負 二 百 三 十 人
 一 討 死 十 九 人
 一 年 右 小 笠 原 信 濃 守 長 次 八 家 來 入
 一 年 負 二 百 六 十 人
 一 討 死 二 百 六 十 人
 一 年 右 松 平 丹 後 守 重 直 八 家 來 十 五 人
 一 年 負 黑 田 東 市 五 高 三 百 八 十 三 人

一 討 死 二 百 六 十 人
 一 年 右 水 野 甲 向 守 勝 成 八 家 來 二 百 八 十 人
 一 年 負 二 百 八 十 人
 一 討 死 二 百 八 十 人
 一 年 右 有 馬 左 衛 門 佐 直 純 之 家 來
 一 年 負 二 百 十 五 人
 一 討 死 二 十 九 人
 一 年 右 寺 沢 兵 庫 頭 賢 高 之 家 來
 一 年 負 五 十 四 人
 一 討 死 四 十 四 人

一 騎右戸田左門氏鉄之家来

一 牛負 百四人

一 討死 六人

一 右松平伊豆守信繩之家来

一 牛負都合六十九百六十人

一 討死都合千百三十人

一 右之外諸大名ヨリ使者ノ面々并ニ請浪人

一 牛負討死ノ負數ハ短トス是寛永十五年寅

一 三月廿七日肥前國有馬郡嶋原落城ス

一 嶋原ノ寄牛ノ諸將六馬印ノ覺

一 握劔緋人子鉄形ノ目 細川越中守

一 段筋ノ馬連 細川肥後守

一 切斯キ有輪又々上ニ鳥毛 松平右衛門佐

一 金ノ上ノ十人 黒田甲斐守

一 共在ノ上ニ黒熊 黒田市正

一 唐頭上ニ鳥毛ノ天目 鎬嶋信濃守

一 輪切サキノ上ニ唐ノ頭 鎬嶋甲斐守

一 茗荷ノ上ニ鳥毛下ニ唐ノ頭 鎬嶋紀伊守

一 鳥毛ノクニス 有馬玄蕃頭

一 二階白鷺ノ毛 有馬兵部女補

一 赤キ吹貫 立花巻彈守

一 白銀ノ二ツ團子 小笠原石近奉夫

一 白銀ノ髭籠 小笠原因幡守

一 赤キ團子 小笠原信濃守

一 浅黄ノ吹貫ノ上鳥毛 松平丹後守

一 熊毛 寺沢兵庫頭

一 金ノクハ羊月ノ下赤キノウレシ 戸田左衛門

一 三階ノ菅笠 戸田次路守

一 白熊ノ三階 戸田三郎右衛門

一 三階ノ鳥毛共黒シ下白シ 有馬左衛門佐

一 二階 黒子ノ下 松倉長門守

一 赤キノ三ツ團子 松倉右近

一 赤キノ瓢ノ上鳥毛 松倉主水正

一 朱ノ丸ノ下鳥毛 榑原毛彈守

一 白四羊ノ朱丸 榑原左衛門佐

一 赤キノ四羊ニ黒五文字 井上筑後守

一 赤キノ四羊ニ金ノ丸中ニ左ニ下アリ 井上清兵衛

一 浅黄四羊ニ金ノ五文字 石谷十藏

一 赤四羊ニ白五文字 馬場三郎左衛門

一 二俣ノ白熊 馬場甲斐守

一 銀板 = 石口ハ

牧野傳藏

一 銀板 = 題目

套 丹後守

一 竿 = 白熊

松平伊豆守

一 鳥毛ノ関衆

水野日向守

嶋原邪宗一揆ノ砌城攻ノ事并三將軍法評判

一 百齊ト云浪人其比備後ノ大守水野勝負ニ屬シ

テ九州ニ下リ彼城攻ノ方便冬春ノ間以上五ヶ

月守城ノ度ヲ語ル有増兼心処ニ寄キ每度攻撃

ト不レ氏一度モ城外ニ利ナクメ大分討死キ負

夥ニ下波込有ケリ然ニ日向守勝負ノ春二月ニ

彼地ノ下リ玉只又故ニ冬ト正月ノ攻撃ヲハ人

傳ニハニ聞及ハレ祇今此陣ニ向テ勝負彼百齊

ヲ召テ尋テト云ク是裡詭小城ヲ流石ノ諸大將

打困ニテ攻マクマレケルヤウハ如何ソヤト

ハ鬼元カ籠城ス氏攻ヤウノ方便ニテ落城セス

ト云夏アウニ其方ノ思慮ヲ聞ハヤト有ケレハ

百齊答ノ云ク恩意ニ存ニ奉候ハ此城ノ地利ヲ

粗見分仕リ候ニ東南ハ海岸高クノ嶮岨ナリ西

北陸ニ續北南ハ長シ凡城内ハ下ニ過ヘカラ

ス南ヲ本丸トセシ古城ハ鐵ニ取立タレ故ニ塙

矢倉等七十キ裸城ニテ大抵ハ平山城十七氏本
凡六地形高數十丈ノ海岸岩壁巖へ夕り寔ニ鳥
三刀ヶリ難ク要害夕リ其故ニ午尸キノ処ナリ
然ルニ度々ノ城攻ニ彼方ヲ守ニ侶リト覺工良
将ノ方便ニ近ク愚将ノ用ル所ニ遠カリケリ其
故ハ西北ノ陸地ヨリ討ニ方攻ニ毎度責ケル故
ニ味方ニ利ナクノ敵勝ニノラスト云フナケシ
バ也想ニ其以前度々聞新ニテハ合戦及ヒ高森
關ヶ原ニテ更ニ馴ル此人等ハ皆々生シ替リテ
軍理不案内ト人達遊年軍學世上ニ以ヤリ家々

軍法者チカヘ王ヲトハ云ヘ氏口ニテ吳孫
ヲモ欺クヤウニ講談弁舌ハイサキヨケレ氏其
義ハ鞍カケノ馬疊ノ上ノ遊ト云ニテ更ニ臨ニ
誠ノ時ハ用工ルニ足サルモ人之謗ニ聞暮リ見
物ノ人其助言ハサモ有又ヘク覺レ氏其人相年
ニナリテ折時ハ中々年折夕テモナラカコト
クナリイテ次ニ往昔ノ良将ノ方便ヲ語り
申スヘニ是ニテ御了簡ナサレヘニ彼九郎義經
楠正成木岡秀吉ナトノ再来マニクテ攻玉ハ
サノニ年間ハ取玉フマニ其子細ハ先ツ義經ノ

軍法十ヲハ徒十ニ若者凡ヲ三十人カ五十人程
勝扱竹橋ヲ三間ワ、余多調ヘサセ其橋ヲ二ヶ
結ヒ合セ六間ト十ニテ城攻ル其時相番ヲ定メ
件ノスリリ武者ヲ竹階子ヲ小船ニ積暗夜ニ城
ノ東ノ岩壁ノ海岸ニ掉サシヨセテ舟ヲ横ヘ岸
維キ陸ノ相番ヲ待既ニ攻カ、リ鯨波ヲ止ケ攻
テハ城中ニテハ是ヲ防カニトスル時件ノ竹橋
子ヲヒタトカケ則取登リ鯨波ヲ合セ攻扱ヲ市
テ七ニ夕テク攻カケ十ハ城中ノ面々東方敵ヲ
防ニキ方便十ク又卒ニ敗軍スヘニ是不意ヲ討

其術カ、テハ寔ニ城内ノ者東方ノ海岸ノ嶮
難ヲ頼ニテ守兵ヲ置サレ弓断ノ子ヲテハ処ノ勝
利是ニ義經一谷ノ逆落ニト其理一ツナリ亦備
而ハ陶山小見山カ笠置ノ皇居ヲ破リニニ此意
得ニ孫子ニ云攻テ必取モ、ハ其守ヲサレ処ヲ
攻レハナリ守テ必堅キ者ハ其攻サレ処ヲ守レ
ハナリ義經陶山小見山等此句ヲ冒襟ニ掛在夕
ヲニ軟往々ニ孫子ヲヨシ平家物語ノ一谷ノ利
害ト太平記ノ笠置軍ノ処ヲ讀テモ彼鞍カケノ
馬畳ノ上ノ遊キニテハ見レモ見ヘス聞レ聞サ

心カ如リニテ古今功ヲ立タル者ハ希ナリ故ニ
古人ノ名句ニモ千兵ハ求ノ易ム一將以得難シ
ト云云扱亦正成ハ如何様ノ方便ナラニヤサレ
ハ楠十ラハ仕高際ヨリ竊ニ大ナル穴ヲ城中へ
掘リコムヘシ既ニ城内ノ物音モ聞ユル程ニ掘
コミタル時鉄炮ヲ數十石穴ノ内へ入置扱牛
十四五足計ニキル物ヲキセソレニ色々ニ繪カ
キ角ニハ朱ヲ塗面ヲハ紙ニテ包ミ其上ヲ竜ノ
形ノ如ク楨入件ノ鉄炮藥ニ火ヲ付テ城中へ火
炎ヲ飛セケル故穴ノ口大キニヒ口マシムルニ其

時彼牛共所掘サニ堪カ子テ城中へ無ニ無ニ
カケコムヘシ城中ノ者は見テ是只変ニ非ス
竜カトアキレテ疑フ処ハ多勢押込ヘシ正成ハ
謀世ニ勝レタルニ依テカクノ如クアラニ扱此
方便齊ノ田草ト云ニ名將即墨ト処ノ城ニ籠リ
城中ヨリ城外へ此謀畧ニテ運テ開シ夏アリ内
ヨリ出ルト外ヨリ入トノ其理一ツヤ正成ナラ
ハ此術アラニ扱扱亦秀吉公オラハ如何攻玉ハ
ニヤ百齊カ云嶋原四万石天草四万石ノ内ニ二
万石ハ一揆トナリ又都合六万石ノ米穀ヲ考ヘ

城内ノ男女ヲ積リ城廻リニ稠枿フリ致シ蔭金
大鞞ヲナラシメテハヤカシ外ハ也サレヤウニ拒
ミテ兵糧攻ニシ玉ハシ欲其故ハ秀吉未羽柴筑
前守ト云シ時因及鳥取ノ城ヲハ吉川ノ家臣吉
川式部ト云シ者守城也時兵糧詰ニシ玉ヒテ
切ヲナシ玉ヒ又アツタラ諸將ヲ外道ノ吉利至
且等ノ奴原ト云ニ死ヲナサレ何ソヤ最其義
異トシ然レ義經公ト正成公古今無双ノ名將ト
賞及ニテ秀吉公ヲ亦右兩將ト一ツニ評セシ
其料簡如何假合秀吉公時ノ運ヨクハ武威ヲ末

世ニ殘シ玉フノニナラレカト云百務カ云ク尊
早ニ限ラス武道ノ切未立タルヲ以テ其人ヲ貴
ヘシ秀吉公ハ義經正成ヨリハ名將タラシカ愚
案ニハ中々兩將ト同シヤウニ秀吉ノ一ハ語ラ
レハ其感心スリナカルヘシ夫夫イカニト尋ヒ
ニ秀吉筑前守ト云シ時三畧ノ講談ヲ聞シカ夫
主將ノ法ハ務テ英雄ノ心ヲ取テ切アルヲ賞禄
シ志ヲ衆ニ通スト讀始メ其文句ノ義理ヲ云ホ
クヲ秀吉聞玉ヒテ云ク三畧一部ノ軍理ヲハ其
一句ノ趣ヲ以得道ニタリ其未ヲハ讀ニアタハ

ストテ則玉ハストナリ亦或時論終ノ講釈ヲ聞
玉フ時子曰吾道ハ一以テ貫セリト讀シテ其理
ノ詭譎ヲ聞テ秀吉ノ曰論語一部ノ奇言妙句此
一貫ナラシ我モ亦自今以後一貫又ハキトテ未
チ是モ聞玉ハ又ナリ其信天下草創有テ朝鮮國
マテ御年ニ入玉フハ目ノ前皆人是ヲ知リ或
夜殿下武篇咄ノ御次而シ仰出サレケルヤウハ
先中國還治ノ年始ニ因幡ノ鳥取ノ城ヲ兵糧詰
ニシ其次ニ備中ノ高松ノ城ヲハ水攻ニシテ毛
利ト和睦ヲ取モノモ取アユス都ハ攻登リ明知

日向守光秀ヲ山崎表ニシテ討取り其以後ニ柴
田修理亮勝家ニ反簡ヲ用ヒテ急ニ取ヒシキ其
儀終テ嶋津ヲ降ラシ公ヒカリシテ後小田原ヲ
攻メテ奥及マテ發向シテ諸方ヲ心ノマシ
年ニ入シテハ是偏ニニ畧ノ功ヲ賞祿セヨト云
シ妙句ト亦孔子ノ吾道ハ一以テ貫セリトノ
玉シ金言石兩句ヲ忘レスニテ夏々物々ノ謀畧
ニ用ヒテ弓矢ヲ取シニ卯急キ夏十ニ世上ノ諸
將ヲヨク見ルニ人ヲ罰ヌルハヤスク功ヲ賞
スル下ハカククニテ大方ハ私欲甚キ故ナレハ

シ其欲ハ力カキト云ハ人々ヨルハシ一度天下
ヲ知ニト心カク北ノ武将收細ハトマテ心ヲ
クハルニハクキタナリシテ何トテ大望ヲ達セ
ニヤ処詮軍法ハ千章万句人ヲ取立功ヲ賞スル
ニ百下御説アリシカ氏御伽リ面々ウカクノ聞
タリトヤ思召ケル亦仰セラレケルヤウハ昔ヨ
リ人々ノサタシケルハ九郎義經中比ニハ楠正
成十トテ古今無双ノ名将トイヘ此秀吉ニ於
テハ左ニ思ハサリケル也其子細ヲイハソ彼
義經ハ本曾義仲ノ教度ノ軍旅ニ戦ヒ負テ絶ハ

勢ニテ吟所ヲ討捕又其後平家ヲ破亡シテ即リ
以来大功ノ名ヲ天下ニ溢サセケリ是ハ赤子モ
知如ク平家ノ積悪ヲ佛神ノ憎ヒ玉ヒテ本曾カ
微勢ニテ追立ラレ帝都ヲ住居トラスモ西海
ノ波ノ上ニ漂ヒ漁父海士人ノ如浦ヲ鳴ケテ呻
吟セシ人々ヲ討タレトテサセル高名トモ思ハ
シス亦梶原ト逆櫓ノ異論是以道理トバハレ
スメ義經ノ耻辱ニ非ヌヤ其故ハ舎兄頼朝ノ代
官トノ惣大將軍ヲ奉テ西國發向ノ大將人何ク
ヤ梶原如キ者ニ侮トラレ子千力ニテ向ハレシ

丁、敵十キ將ト見ハタリ大將ノ器備リ威徳ヲ以
テ推スナヲハ豈梶原カ首ノアカラシヤ義經弁
慶知恵ノアラハ平家入水ノ同日ニ西國ニテ梶
原父子ヲ討スニテ叶サル下ニ此漏チヌカシテ
總ニハ彼カ爲ニ諛ヒラヒテ鎌倉中ニ足ラズモ
ナラスニテ割ヘ土佐坊ツレニ夜討ニアハント
シテ立ナキ命ヲヒロイ頼朝ト午功ノ證據ニ
ニ非ナル処ニウカクト堀河ニ長居シテ後々人
考ヘナカリシハ是知將カ其節早ク奥羽西國ノ
院宣ヲ申請テ辨慶ニ渡シ率ニ諸勢ヲ催シ押テ

鎌倉ヘ攻メ下リ且亦俾勢駿河ヲ奥品ニ差下シ
勢ヲ調ヘ責止ヒ東西ヨリ頼朝ヲサシバサシテ
無二無三ノ合戦ニ及カ扱以大臣殿父子ヲ鎌倉
ヘ渡シ義經腰越カ直ニ奥羽ヘ下リ秀衡ヲ頼
之大軍ヲ率シ鎌倉ヘ發向ヒハ無下ナリハア
ルマシキニ多ハ和平ノ扱ヲ待ク梶原カ舌根ヲ
ヌキ頼朝ト和年ニテ或ハ四國ヲ恩賞ニ領スルカ
或ハ九州ヲ賜ルカ有無人合對ニ及ヘキ下ノヨ
シク其圖ニアタラス比山伏ノマ子ヲシテ奥羽
ヘ下リ十八秀衡ヲ頼ニテ不日ニ責登ル方使ニ

及へキテ十ルニ其義ニモアタハス人高館ニヤ
シト安座ノ百歳ニ満タル秀衡カ死ヲ待シテ
十ノイウヤ知仁勇ノ三徳ヲカヌルヲ以テ名
將トハシ又義經辨慶比三勇ハ勝タレモ智ハ
不足セリ右四箇度ノ番又カセルニ次楠正成
ノ赤坂其外ニモ処々ニテ數度ノ武功アリトハ
云ハレヤシト切腹セシト是名將ノ行跡ニア
ラス一門旧臣ナシ居テ匹夫ノ勤也ニヨリハ直
義ヲ亡サシニハカシ合戦ノ勝負ハ時ノ運ニ
モヨリケレハ負テモ更ニ耻ナクス謀臣タラ

サレヲ以テ耻トス正成最後ノ合戦ナシト大
事ノ軍法ヲ爰ニ又出スヘキトナシ其法ヲ
キカス西国ヨリ尊氏兄弟大軍ヲ率テ攻上ル
ヲ兼テ知ヲサルトハ云ハレシ此漆川ヲ戰場ト
定テハ鳥雲ノ備霞ノ備釣竿ノ備残伏ノ備ヲ以
テ直義ヲヲヒヤカシ西国ノ取集タル民兵ヲ
カケテヤマシテハ直義ヲハ此処ニテ討取ヘキ
ニ正成カ最後ノ一戦ノ抄ヲ以テ三世ノ武勇ノ
佳名ヲ却テ愚名ノ名タテ成ヌカク云秀吉ヲ義
經正成ニシタラシニハ恐ラクハ軍ニ花ヲサカ

巴入逢ノ鐘山下風ニテ吹散ニテ事ヲト齒咬
ヲシテノ王ヒキツト見廻ニテ仰ヒケルハ你等
此秀吉ヲ右兩將ニシタリトヤノ王ノ口裡ハア
ルマシトノ面躰外ニアハラシテ見ハタリ莫モ
愚カヤ義経ハ源家ノ正統タリ正成ハ大和河内
兩國ノ十騎ノ大將族頭ナリカク云秀吉ハ日本
カクシナキ凡俗ニテ信長公ニ始テ仕ヘシ時ハ
無僕ノ境畀独歩タリサレハ開闢以來終ニ其例
モナキ大岡ノ高官マテニハホリ秀吉弓矢ヲ
取テ面目古將ニコトハタシテ面躰カ心ニサシ

ニテ秀吉カ口ヒ口キ荒言カナト思フハ其義一
トハ浮言ナシ日本ヨリ異國ヲシタカヘシ下ハ
神功皇后ト忝モカケマク此秀吉ナリト膝ヲ直
シテ座中ヲキツトニラムテ各心ノ疑ヲ散ニセ
ヨト仰ケレハ御伽ニ伺公ノ面々其義逐一存ニ
タレトナレハ誰カ御虚言ト存ル者モ十カ外ニ
トニ此百齊壯年ノ始メ世物語ヲ懐ニ兼リ及ヒ
キト云云夫高下氏ニ名利ノ二ツニホタサレ昨
日マテ秀吉ト肩ヲ双ヘ膝ヲリニニ單モ今日ハ
亦主君ト仰ク下何故ヲヤ夫ハ秀吉利害ヲヨク

見付玉ヒテ志ヲ衆ニ施シ万兵ヲ惠ニ人ヲ取立
玉フ丁古今稀ナル明君ホレハ誠寛仁大度ト
是ヲイハシモノ欲唐国ニモ名將ノ饗礼行ヒシ
軍法アリ亦日本ニテ赤挽黒挽ノ軍法アリ是ハ
却テ後日ニ害ヲ招クニ近カラシカトハハ病
人ノ其病ニイヤナル毒食ヲ好是ヲ与ルニ一旦
快メ食ヌ、ニ氣晴テイサキヨシト以テトモ
其毒味ノ爲ニ中ラレテ終ニハ重病ト成テ本復
シ難シ武士モ亦的面ニ耻ヲアタシ赤黒挽ヲ分
子ヲ十法、丁モ不仁ノ言ワサニテ遺恨招ク基

ヒタラニ諸卒是ト俱ニ死下ク是亦氏ニ活ハリ
ノ危キヲ恐レサラシムル丁偏ニ秀吉ノ三及ノ
御法正ニキ故トカヤ禄重ク与ヘテモ情ノナキ
大将ニハ万兵十ワカズ情ヲカケテモ礼ノナキ
大将ニハ思ヒツカス礼アツテモ禄ヲ与ヘ子ハ
信ニス三等ハ一ニメニツ三ニメ一ツ右語ニ曰
礼ヲ崇則ハ智士至ル禄重キ則テ古死ヲ争フ亦
曰雨フシニ笠張ヌト云是礼ナリ是ヲ以テ想
フニ異国ノ名將饗礼ノ軍法ト我戟ノ赤挽黒挽
ノ軍法ヨリ秀吉ノ仁義ノ法ニシクハナシ且亦

御謀略ハ偏孫子力郡羊ヲ驅カ如ク兵子力漏船
 ノ中ニ座シ韓信力囊砂皆水ノ備暗ニ相叶ヒ名
 ハ異ナシト畢竟必死ノ術ナレト
 一 同年二月ニ江及勢多ノ橋桁ニ本自ヲ燒ス
 一 同年閏三月五日ニ十代姫君御方御誕生
 一 同年七月八日ニ星月ヲ貫リ
 一 同年江戸中ノ風呂屋都子世七斬ノ者トハ仰セ渡
 カレアリ処謂江戸中ノ風呂屋氏ニ遊女三人ヨ
 リ多ク指置中間鋪者ト若隠ニ申候ハ、二人ニ
 氏多抱置族於有之者急度可被処嚴科之旨兼テ

仰セサレ候之処ニ其旨ヲ令違背之由吉原之者
 氏ヨリ被訶人付御穿鑿ノ上相背御制禁風呂屋
 ノ亭主氏ヲ吉原ノ大門口ニハリツケニ御カケ
 被成候矣

一 同十五年正月廿四日台徳院殿七回御忌ニ就テ
 増上寺ニ於テ万部御經御執行

一 御屏風
 一 右同断
 一 梨地廣蓋
 一 御屏風

玉露叢卷十六

正保二年ヨリ

一 寛永十六年九月廿一日尾張右兵衛督光義ハ

今ハ光友ノ子代姫君御方入樂

一 同年東山智恩院御再興了リ

一 同年江戸大火此時御城回祿ス御城御普請出來

シテ御移徙ノ時御一門及諸大名衆ヨリ献上物

ノ品々

一 梨地廣蓋 十 尾張大納言 義直ハ

一 右同断 十 紀伊大納言 頼宣ハ

一 御屏風 五双 水戸中納言 頼房ハ

一 梨地廣蓋

十

越前宰相

忠昌口

一 小重箱

五組

越後中將

光長

一 御料利鍋

二組

小松中納言

利常

一 御刀拭

一

一 梨地御臺子

二飾

松平筑前守

光高

一 御屏風

五双

松平陸奥守

忠宗

一 銀御臺子

一飾

一 御屏風

五双

一 梨地御刀拭

二

一 小屏風

一双

松平新太郎

光政

一 御袴

二

一 御屏風

十双

一 御障子

五

上杉彈正大弼定勝

一 銀御臺子

二飾

松平薩摩守

光久

一 御手拭懸

二

一 梨地御年水桶

二

松平相模守

光仲

一 銀御鉢

十

一 盤銅

廿

依竹修理大夫義隆

一 御屏風

五双

一 梨地御臺子

一飾

松平隱岐守

定行

一 梨地御杖臺

一通

一 御屏風

三双

松平阿波守 光隆

一 御屏風

十双

松平出羽守 直政

一 花毛檀

廿枚

一 梨地御重箱

五組

一 銀御手水洗

二組

松平土佐守 忠義

一 銀御鉢

五

一 梨地御衣桁

十

森内記 長継

一 銀御懸盤

二通

伊達遠江守 秀宗

一 御屏風

三双

一 御褥

一

京極丹後守 高廣

一 毛檀

十枚

宗對馬守 義成

一 毛檀

廿枚

毛利甲斐守 秀元

一 御刀拭

一

立花元近將監 忠茂

一 御手拭懸

一

一 御錫切立

十

織田出雲守 信友

一 奉書紙

世束

松平大和守 直基

一	奉書紙	廿束	松平土佐守 直高
一	毛氈	廿枚	松平右近大夫 輝貞
一	梨地御手水洗	一	丹羽九京太夫 先重
一	御手拭懸	一	井伊掃部頭 直孝
一	銀御鈍子	一	
一	銀御提子	一	
一	銀御湯漬鉢	一	
一	銀御杵子	一	
一	銀御湯次	二	保科肥後守 正之
一	御寢衣	三	

一	御蒲團	二	松平下總守 清通
一	御屏風	三双	酒井宮内大補 忠勝
一	翠簾	十間	
一	銀御手水洗	一	松平式部大輔 忠次
一	御樽	二	
一	御火鉢	五	奥平義作守 忠昌
一	御手水鉢	五	小笠原右近大夫 忠政
一	御屏風	二双	松平越中守 定綱
一	御吳服	五	石川主殿頭 忠綱
一	唐金御手桶	十	

一 御燭臺

十

小笠原信濃守 忠貞

一 御手燭

十

牧野右馬亮 忠成

一 梨地手拭懸

一

戸田九門 氏鐵

一 梨地御手洗

一

有馬中務大輔 忠口

一 銀御臺子

一 飾

水野義作守 勝廣

一 梨地御衣桁

二

南部山城守 重直

一 梨地御衣桁

二

本多能登守 忠義

一 梨地御手水洗

一 組

水野隼人正 忠清

一 銀切立

二

御燭臺

一 梨地御重箱

二 組

一 梨地御刀拭

二

内藤帶刀 忠貞

一 御盤銅

五

小笠原信濃守 忠貞

一 梨地御手水洗

三 組

本多伊勢守 忠利

一 塗手桶

五 拾

松平周防守 廣次

一 銀切立

二 拾

松平丹波守 廣末

一 御料理道具

一 通

松平因幡守 廣末

一 手桶

五 拾

松平和泉守 廣末

一 御臺子

一 飾

松平因幡守 忠良

一 御臺子

一 飾

本多下総守 俊次

一 御臺子

一 飾

大久保加賀守 秀任

一 御臺子

一 飾

松平五助 忠親

一 御臺子

一 飾

大久保加賀守 秀任

一 御蠟燭 三百挺 真田伊豆守 信元

一 御盤銅 五 溝口出雲守 宣直

一 炭取 十 京極 六九

一 十能 十 相馬大膳亮 義胤

一 梨地御手水洗 二組 松平若狹守 康信

一 塵壺 十 秋田河内守 後秀

一 御刀掛 一 戶澤右京亮 政盛

一 御刀掛 一 山崎甲斐守 家治

一 御重箱 三組

一 御燭臺 十本

一 御刀掛 二十

一 梨地御手掛懸 一

一 御燭臺 十本 園部義濃守 定勝

一 御手燭 十 京極形部少輔 高和

一 唐金火鉢 六

一 唐金大火鉢 六 松平肥前守 忠直

一 唐金小火鉢 十 小笠原壹岐守 直政

一 唐金盤銅 五 坂淡路守 安元

一 御手水鉢 五 寺沢兵庫頭 堅高

一 御腕 五拾人前

一	御小屏風	一	双	浅野内近頭	長直
一	錫御鉢	十		堀義作守	親昌
一	梨地御刀拵	十一		浅野因幡守	長治
一	錫御切立	十		水谷伊弉守	勝隆
一	大高引合	二	束	中川内膳正	久盛
一	御料理鍋	五		松平淡路守	利治
一	錫御鉢	五		津經土佐守	信茂
一	錫白鳥	五	双		
一	銀御重箱	二	組		
一	錫御切立	二十			

一	錫御鉢	十		土岐山城守	頼行
一	錫御切立	十		三浦龜之丞	
一	御行燈	廿		秋月長門守	種恭
一	錫御切立	廿		織田九衛門依	長治
一	御湯	十	對	龜井能登守	茲政
一	大湯	五	對	户田因幡守	忠能
一	御手桶	五十		遠藤但馬守	
一	御樽	二		織田因幡守	
一	錫御切立	十		太田原九兵衛	
一	御料理鍋	十五			

一	銀御鉢	廿	古田兵部少補	重勝
一	御錫鉢	十	内藤兵部少補	
一	塵盃	十	嶋津万壽丸	
一	錫御切立	十	毛利市三郎	
一	唐金御火鉢	五	秋元越中守	宮朝
一	梨地御盃箱	二組	松平石見守	輝澄
一	塵盃	一	青木甲斐守	
一	御小屏風	一	伊東大和守	祐久
一	錫御切立	拾	高木善次郎	
一	塵盃	拾	木下元兵衛	

一	御大錫	五	阿部備中守	
一	御臺子	三	永井信濃守	尚政
一	御手水洗	一	内藤志广守	忠禎
一	御行燈	二	井上河内守	正利
一	御行燈	二	水野監物	忠善
一	錫御重箱	二	松平出雲守	勝直
一	御料理鍋	五	水野備後守	
一	盤銅	五	松平右衛門大夫	
一	錫御切立	十	山口但馬守	弘隆
一	御刀懸	一	諏訪出雲守	忠垣

錫御切立	二十	分部与三兵衛
梨地御刀掛	二十	内藤豊前守 信良
錫御白鳥	十	立花民部少輔
御料理鍋	十	斤桐羊之助
錫御切立	十	木下泆路守 利尚
御筆	五拾本	建部内近頭
御手水洗	一組	言木撰津守 忠房
錫御鉢	十	栗山修理亮 一玄
塵壺	十	三宅大膳亮 康盛

御筆	十五本	佐久間權之助
錫御鉢	五	西尾丹後守
毛罎	十枚	一柳藏人 直頼
銀御切立	十	池田内藏之助
錫御湯盃	十	伊東甚太郎 貞治
錫御湯盃	十	伊東甚太郎 貞治
梨地御刀掛	一	毛利日向守 就隆
御錫	五对	阿部市正
御行燈	十	遠山又太夫
御褥	貳	森川半弥

一	御湯次	六	小笠原主膳正
一	銀御臺子	一	飾田加賀守 正盛
一	塗御手桶	五十	松平伊豆守 信細
一	御次鉢	五	
一	御小屏風	二	阿部豐後守 忠秋
一	御卓子	一	
一	御臺子御天目	一通	阿部對馬守 重次
一	御廣蓋	二十	
一	御手相	五十	金森山雲守 重頼
一	御簾木	廿本	織田修理亮

一	御簾木	世本	小出与平次
一	毛氈	十枚	新庄越前守 直好
一	同新	十枚	大村丹後守 經佐
一	同新	同新	内田信濃守
一	同新	五枚	井上筑後守
一	同新	同	柳生但馬守
一	同新	同	加々仇甲斐守
一	同新	世枚	稻葉義濃守 正利
一	御間鍋	十	稻垣摸津守
一	御料理鍋	十	土方河内守 雄次

一	御錫鉢	十	西卿孫六郎
一	御火鉢	二	相葉泚路守 絶通
一	御行燈	廿	土屋民部少輔 利直
一	塵壺	廿	北条久太郎 氏宗
一	御手拭懸	二	加茂内藏之助 朋友
一	錫御湯次	六	行桐石見守 貞富
一	盤銅	五	松平市正 直次
一	塵壺	十	京極主膳正 高曉
一	錫御切立	十	户田土佐守
一	塵壺	十	織田上野助

一	錫御鉢	十	松平義濃守 定房
一	御碁盤	十	松平主殿頭 忠房
一	御象戲	一	一面
一	塵枱	十	松平主殿頭 忠房
一	塗手桶	五	植村冬羽守 家次
一	梨地御刀懸	一	松平九近大夫 成照
一	盤銅	三	鳥井主膳正 忠春
一	銅塵壺	五	板倉主水正 重矩
一	盤銅	二	松平太郎八
一	錫御鉢	十五	平尾石見守

一 塗手桶	二十	青山大膳亮	幸利
一 御伽羅	二竹	相良壹波守	頼寛
一 錫御切立	十	谷大学頭	
一 錫御切立	十	土方木工助	雉氏
一 塵壺	二十	日根野織部正	吉明
一 錫御切立	十	岩城但馬守	
一 同	十	溝口金十郎	
一 塵壺	十	六卿伊賀守	政勝
一 錫御鉢	十	市橋下總守	
一 錫御鉢	十	堀田九門	

一 錫御切立	十	此器大膳亮	幸利
一 大錫	十	五嶋孫治郎	盛次
一 御廣蓋	二	稻葉能登守	信通
一 塵壺	十	九鬼大和守	
一 錫御鉢	十	一柳丹後守	直重
一 御間錫鍋	十		
一 錫御切立	十	久苗嶋丹後守	通春
一 御燭臺	十本	松平飛彈守	利治
一 御手桶	百	本多八郎兵衛	
一 燭心切	十	杉原伯耆守	

一	同心入	十	真田隼人正
一	錫御鉢	十	有馬藏人
一	梨地御午掛懸	二	仙石越前守
一	梨地御午水洗	一組	丹羽式部少捕
一	塵壺	十	本多飛彈守
一	奉書紙	十束	松平山城守
一	御狹箱	二	真田内記
一	御蠟燭	二百挺	井伊兵部少輔
一	錫御鉢	十五	九鬼式部少輔
一	御料理鍋	十	

一	御書棚	十	菅沼織部正
一	塵壺	二十	堀三右衛門
一	衝立御障子	二本	堀大學頭
一		一組	土井大炊頭
一		五	酒井河内守
一		一	酒井讚岐守
一		二十	永井日向守
一		十	小堀遠江守

一 御手桶	百	酒井日向守 忠能
一 搔器	百	
一 御錫鉢	五	皆川山城守 廣照
一 錫御切立	六	堀越中守
一 天鷲御田	十	朽木民部少輔 禮繩
一 塵壺	十	安藤右京進 重長
一 御節	五十	
一 御火皿	百	牧野内近頭 信成
一 御茶碗	百	
一 銅御水風呂	一組	

一 御手掛懸	二	黒田 万吉 高政
一 御炭計	五	黒田甲斐守 長直
一 御屏風	五双	松平右衛門佐 光之
一 同	十	北条出羽守 氏重
一 塵壺	五十	太田備中守 資宗
一 御帚	五十	
一 大行燈	五	松平伊賀守 忠勝
一 塵壺	十	
一 手フキ	十	板倉周防守 重宗
一 三ノキリ	十	

一同十七年四月十三日家光公日光山江御參詣今年東照權現廿五回御忌付万部御經御執行有于廿三日還御

一同年天下ニ牛多斃

一同十八年正月廿九日リ夜リ翌晦日ノ夜工

分一日二夜江戸中大火也本八中橋通町之此時

町敷九十七町并ニ武家屋布百世斬燒矢ス

是御代始テノ大火ト云

一同年ノ春ヨリ十九年ノ春迄天下飢饉依テ餓死

ス尤乞食道路散礼ス

外家御許ニ

一同年八月三日己未冠若君御降誕ニ竹千代君ト

号ス是公方家細公ノ御莫

一同九月三竹千代様江日本國中ノ大小名御禮ヲ

申上ル

一寛永年中國廻リノ衆中者

豊前豊後筑後筑前肥後大隅薩戸日向壹岐對馬

右領西十一ヶ国ヲハ

松田吉右衛門蔭田教馬

三人江被仰付

一播广備前備中備後安藝周防長門美作但馬因幡

伯耆山雲石見 右十三ヶ国 江則内藤丹波守石
 尾七兵衛三上羊兵衛右三人 江仰付ラ儿
 一山城大和棋津河内和泉伊勢伊賀志方紀伊沔路
 阿波讃岐伊豫土佐 右十四ヶ国ハ 津田平元
 門本多丹後守佐 權兵衛被仰付儿
 一越後越中能加賀越前佐渡若狹丹波丹後近江
 右十ヶ国ハ 能登小十郎城半元 飛門中根又兵衛
 被仰付儿
 一陸奥出羽常陸 右三ヶ国ハ 林丹波守森次郎兵
 衛新庄右近被仰付儿

一武藏相模上総下総安房上野下野甲斐信濃伊豆
 駿河遠参河尾張美濃 右十六ヶ国ハ 大井
 新右衛門守牧河内守嶋弥左衛門被仰付儿
 一同廿年六月朝鮮人來朝ス
 一同年九月廿一日 廿帝御讓位十一月三日 御即位
 酒井讃岐守忠勝 永平伊豆守信綱右兩將上京也
 忠勝ハ 少將信綱ハ 侍從任セラレ
 一同廿一年正月十五日ヨリ 増上寺ニ 於テ万部ノ
 御經御執行是台徳院殿十三回御忌ニ 付御法夏
 也

一 同年七月廿四日己ノ尅御菴松君御誕生將軍家

家光公四十二ノ御子ニ依テ天樹院殿御孫子ニ

被遊後甲府宰相殿御事也

一 同年十月十六日土井大炊頭利勝卒

一 同年ニ武家系圖年百七拾卷ヲ撰

一 同年十二月十六日當公方様御稱号家細公下申

奉ル

一 寛永ヲ改テ正保元年ト号ス

一 正保二年正月廿三日京都宅宕山火上開山ハ慶俊

法師僧郡ハ和氣ノ清磨呂ト云此山ニ昔年七

年坊有下也

一 同年同月同日松平筑前守光高卒春秋廿一歳本

性公前田同年十五日頌死ト云知季翁前子同

一 同年ニ五条ノ橋石橋ヲ作ル

一 同年二月十九日ニ亀松殿御出生五歳ニテ早世

一 同年三月十五日ノ夜日光月朱ノ如シ

一 同年八月朔日越前宰相忠昌ハ逝去行年四十九歳

一 同月將軍家天海僧正ニ命シ玉帛ヲ武具ニ於テ

一切經

一 同年九月八日松平越前守光宗卒去春秋十九歳

是陸奥守忠宗ノ旨ニ依テ...

一同年同月十日ニ上杉彈正大弼定勝^勝卒行年^四十

一同三年正月八日徳松殿御坐生後館林宰相細吉々

ト号ス...

一同四年ニ長崎表江黒舟二艘着津ス...

一同二艘八舟ノ大小之莫...

一艘長廿二十六間 横幅七間 舟底ハ八間アリ

石火矢式拾挺入心一艘長廿廿四間 横幅七間

舟底ハ八間アリ 石火矢廿四挺入心...

右之黒舩二艘ハホルトカルト云国ヨリ漂着ス

依之四国之諸大名衆ヘ奉書ヲ以テ右之唐舩之

警固ヲ仰付ラル其時之舟巾人数等ノ覺

一松平筑前守忠之人数并舩数之事

人数一万二千七百人 内水主二千九百五十

四人 舩数三百三十三艘

内 舩六十一艘 舩幕惣地藍ノ中白舟

巾惣紺白餅

一松平隠岐守定行是上使ノ惣大將軍監

人数六千三百十一人

内 水主二千六百十七人

一 船數百艘

一 内 四十八艘

一 舟幕藍下白十ノ段

一 舟幕紺

一 細川肥後守光高

一 人数一万千三百壹人

一 船數二百世三艘

一 内 水主四千八百九十六人

一 内 百八艘

一 舟幕紺

舟市右同断

一 錫嶋信濃守勝茂

人数壹万千三百六十人

内 水主三千三百五十七人

一 舟數二百三十五艘

内 二十五艘

舟幕紺

舟市右同断

一 立花龙近將監忠茂

人数三千八百七拾人

内 水主八百人

一 舟数三拾三艘

内 九艘八関船

舟幕二幅 四幡

舟巾右同断

一 小笠原信濃守長次

内 人数千六百七十八人

内 水主三百五拾人

一 舟数二十艘

内 九艘八関船

舟幕惣藁 白キ三階菱

舟巾右同断

一 寺澤兵庫頭質高

人数三千五百五人

内 水主六百八十五人

舟数三十二艘

内 十三艘八関船

舟幕惣地白 黒餅

舟巾右同断

一

...

...

...

...

...

...

...

...

...

